

## 【職員・保護者に向けた実践】

### 実践①

本園の子どもの姿から問題点を探り、10の姿の内、どこを育てていきたいか焦点を当てて取り組むことにした。本園の課題は子どもが自ら行動を起こすことができず、大人に解決策を尋ねたり頼ったりしてしまう園児が多かったことから、『自立心』の中の『自信をつける』というテーマに絞った。

月2回、学年毎に会をもつ。テーマに沿って記録者が対象者を決めエピソード記録を書き、事前に配布。参加者は考えをまとめて参加するので、会の中で対象者について様々な意見や話題、援助について質問等を出し合いながら話し合う。そして最後に認定こども園教育・保育要領で学びや今回有効であった援助を確認している。

(成果)

エピソード記録を始めてから、書く事で保育者の意識付けができ、援助が変わってきた。例えば、園児が考えたり気付いたりできるように声掛けを意識したり、じっくり取り組めるように時間をたっぷりとるようにしたり、又子どもを信じ、まかせて待つ事が『自信をつける』ことに有効であることが実感としてわかったと考える。以前に比べ、保育者に頼らずに園児たちで相談したり解決したりする姿が増えてきたと感じている。

### 実践②

職員や保護者が目に届く共有スペースに「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を掲示し、各項目の中に0歳児～5歳児の遊びや活動写真を貼り、その様子を吹き出し等で伝えたり子ども達の声を記入したりしている。それぞれの発達に応じた遊びや活動に取り組み可視化することで『どの部分が育っているのか』『どの部分の経験が足りないのか』等が、若い職員にも分かりやすく、今後の取り組みや課題の見通しが立てやすい。継続的な保育・教育に繋がるよう各年齢の職員同士が連携を取り合い日々役立てている。

学期末では進級、特に小学校就学に向けた取り組みも把握でき、年齢や個別に合わせた援助をしている。

### 実践③

保護者へは、園便り、クラス便り、よい子ネット、ホームページでも園内の様子を発信しているが、0歳児～5歳児の幅広い多様な遊びや活動の取り組みの意図や成長を行事の時等に伝えている為、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」の掲示の前に足を止めて関心を持って見ていただいている。今後も当園の良さをいかした自然いっばいで、のどかな環境の中で、職員全体が連携し一人ひとりと丁寧に関わり、保護者や地域の方々と共に子どもの成長を見守っていきたいと考えている。

### 実践④

園内研修としてミニ公開保育を行い、お互いの保育現場の様子を見学している。職員同士が互いの保育を観ることで、良い所を認めたり、課題を見つけたりするよい機会となっている。

見学の仕方はクラスの中で抽出児を選び「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を踏まえて観ている。実際に様子を観ることで、個人が成長している所、援助が必要な所を把握することができ、事後研修でも活発な意見交換や付箋を貼りながら自分の思いや考えを発表し、職員同士で詳細な話

し合いができています。

園内研修では指導主事の先生にも参加を依頼し、色々な助言をいただき実践している。昨今ではコロナ禍の為、外部の来園が難しい状況なので残念に思う。

### 実践⑤

年齢別に4月、3月の姿をまとめたものを照らし合わせ、年齢に応じた発達段階の共通理解を図る研修を行う。全職員で各年代それぞれの育ちを見直し、共有することで、こども理解を深めた。

小学校の職員との合同研修会を行うと共に、小学校全職員が保育の様子を参観する機会を設け、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を共有する。

就学後のスタートカリキュラムのねらいを明確にしながら、就学までのアプローチカリキュラムの見直しや共有に取り組んでいる。幼児期と児童期の円滑なつながりと連続性が分かる連携カリキュラムを作成した。

こども園での活動が小学校の教科とどのようにつながるのか具体的な姿で捉えられるように、接続カリキュラムと学びのつながりカリキュラムの作成を試みた。

### 実践⑥

幼児期の終わりまでに育ってほしい10の姿を踏まえて、0歳児から5歳児の発達を意識してねらいを考えているが、一学期ごとに園全体でねらいや取り組みについての反省会をして、園全体で取り組みについて考える。